

山梨県立文学館 館報

1989(平成元)年
11月 創刊

第107号



「心づくし」と「親切」 中島京子
開館三十周年記念
特設展「太宰治 生誕110年 — 作家をめぐる物語 —」 展示資料より
閲覧室より・寄贈資料より

館からのご案内
教育普及事業報告
第二十七回やまなし文学賞結果・
「資料と研究」第二十四輯目次
館の日誌・利用のご案内

開館三十周年記念特設展 「太宰治 生誕110年」

—— 作家をめぐる物語 —— 開催

二〇一九年四月二十七日(土)～六月二十三日(日)

山梨県立文学館は一九八九(平成元)年十一月三日に開館し、今年三十周年を迎える。

三十周年記念展覧会として、すでに開催中の「新収蔵品展 手書きのリズム」に続き、四月二十七日から特設展「太宰治 生誕110年 — 作家をめぐる物語 —」を開催する。

太宰治(一九〇九～一九四八 青森県生まれ)の作品は、色褪せない魅力を放ち、今も多く読者を得ている。そして、その生涯も様々な人々との関わりや出来事



太宰治「ヴィヨンの妻」原稿 寄託資料

が織りなす物語に彩られている。

一九三六(昭和十一年)六月の第一創作集『晩年』(砂子屋書房)刊行には、檀一雄(一九二一～一九七六 山梨県都留市生まれ)の尽力と、編集を担当した浅見淵に宛てた太宰の必死の懇願があった。

また、一九三九(昭和十四年)一月の石原美知子との結婚は、井伏鱒二をはじめ、井伏の弟子の高田英之助の婚約者とその両親など、多くの人々の配慮によって実現した。

このほか、原稿の注文を記したノート「創作年表」が示す戦後の活躍など、作品だけでは窺い知ることができない太宰をめぐる物語を、所蔵資料を中心に紹介する。二〇〇九(平成二十一年)年春に開催した「太宰治展 生誕100年」以降に新たに収蔵した高田英之助宛太宰治書簡、妻美知子とその実家石原家に関わる資料、石原家をモデルにした津島佑子の長編小説「火の山—山猿記」原稿なども展示する。

なお、展覧会会期中には『文豪ストレイドッグス』の展示コーナーを展示室内に設ける。
※グッズなどのノベルティはございません。

■関連イベント

○対談「要申込定員150名」

「太宰治・著書と資料をめぐる」

6月15日(土) 午後1時30分

講師 安藤宏(東京大学教授)

川島幸希(秀明大学学長)

会場 研修室

○講座(年間文学講座3)

「要申込定員150名」

「太宰治—甲府での足跡をたどって」

6月2日(日) 午後2時

講師 保坂雅子(当館学芸課長)

会場 研修室

○ワークショップ「要申込定員20名」

「富嶽百景」スノードームをつくらう

5月11日(土) 午後1時30分

講師 穂坂優(ハンドメイド作家)

対象 小学生以上 材料費500円

会場 研修室

○閲覧室資料紹介

「太宰治を読む」

4月27日(土)～6月23日(日)

* 要申込のイベントは、お電話か当館受付でお申し込みください。対談と講座

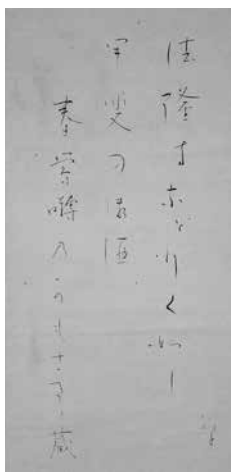
は当館ホームページからお申し込みできます。入場無料。ワークショップは材料費がかかります。

開館三十周年記念「新収蔵品展」

手書きのリズム 開催中

三月二十四日(日)まで 観覧無料
二〇一八年に新たに収蔵した約八十点の資料を展示。

与謝野晶子、飯田蛇笏、中村星湖、津田青楓の書、芥川龍之介、武田泰淳の原稿、辻邦生の手紙、やまなし文学賞小説部門受賞作挿絵原画など、多彩な資料がそろそろ。様々な作家の手書きの文字には、線の強弱や書かれた速度など、独特のリズムがあり、作家の個性をうかがうことができる。



与謝野晶子「法隆寺など行く如し甲斐の御酒春驚愕(しゅんのうてん)のかもさるゝ蔵」軸装

寄託資料 萬屋(よろずや)醸造店蔵
晶子は、一九三三(昭和八)年秋に南巨摩郡富士川町にある萬屋醸造店を訪れる。

つ
い
づ
く
し
と
つ
親
切
し



初めて読んだ太宰は、「走れメロス」と「女生徒」だったはずだ。少年少女向けの文学全集の太宰の巻は、その二つの短篇がタイトルになっていたからだ。

でも、もちろん、収録されていたのは二篇だけではないわけで、「お伽草紙」とか「ろまん燈籠」、「乞食学生」なんかが入っていたのではないかと思う。いまやもう、定かではないけれど、「ろまん燈籠」と「乞食学生」は、わりと好きだったのを覚えている。

「走れメロス」は学校の教科書にもたしか載っていて、読んだけれども強く違和感があった、長いこと好きになれなかった。友だちを人質に残す意味がよくわからないのだ。安野光雅さんが新聞のインタビューで「走るメロス。友達に頼め」とおっしゃっていたのだが、ほんとうにその通りで、友人の命を危険にさらさないで、妹の結婚式に届ける服の配達のは

うを、友人に頼めばよかったのではないだろうか。ただし、そうすると、メロスが走らないので小説が成り立たなくなる。

しかし、何年か前に読み返してみても、多少変なところはあるけれども、勢いがあっていいじゃないかと思いついた。太宰の小説は、計算され尽くした精巧さなどを感ぜさせるものではないけれど、書き手の肉声を楽しめばよいのだと思う。若い時はそれが苦手で、肉声は勘弁してほしいと思っていたけれど、作者の声があまりに透明化されている文章というのも、それはそれでどこか、つまらないものでもある。「走れメロス」は太宰中期の代表作の一つで、中期の特徴はあかるくてポジティブなところだ。そういう太宰もいるのだと、中期の作品群は高らかに宣言している。

太宰ファンの多くがバイブルのように

だいたいになっている、晩年の代表作「人間失格」が、じつはあまり好きではないので、太宰について語ったり書いたりすることは、いつもちょっとばかり躊躇や遠慮が伴う。太宰は「人間失格」に書いた話（もちろん、ほとんどは自分の話だけれど）を何度も何度も書いている。デビュー短篇集の最初的一篇からして、その話だ。もちろん、旧家に生まれ育った文学青年の、心中による自殺未遂あり、精神病院行きありというストーリーは、ドラマティックではあるかもしれない。でも、いつのころからか、太宰はこの自分自身の伝記的ストーリーで遊び始める。心中事件で死んだはずの女が生きていて語るといバージョンや、太宰の乳兄弟が主人公というバージョンなどがあって、私がいちばん好きなのは「春の盗賊」という、「六十、七十まで生きのびて、老大家」になることを決意している「私」（もちろん、太宰の分身）が語り出す短篇だ。

作中で太宰は繰り返し、「作者」と「作中の『私』」を混同しないようにと、読者に注意を促す。「作者」と「作中の一人称の語り手」は、しばしば読者によって同じ人物だと誤解されがちだけれども、小説の中の「私」は、作家自身とは限らな

い。たとえば、作家自身の自伝的な要素を取り入れていようと、それをフィクション化する人物は、フィクション化される人物とは違う。少なくともまったく違う「状態」であることは確かだ。

そう考えながら読むと、太宰治は一般に思われているような、魂がそのまま叫び出したみたいな作家ではなく、何を書くかよりもどう書くかに苦心した作家なのだと感じられる。

どう書くか。読者をいかにしてストーリーに巻き込むかを考えて、工夫して書くこと、しばしば読者を笑わせて楽しませるエンターテインメント性について、太宰は「心づくし」あるいは、読者への「親切」と呼んだ。私は太宰のこうした読者への思いやりが、その文学の特徴だと思っている。

晩年の「人間失格」は、書く題材と作者の距離がとて近しい感じがするので、そこが私を少し敬遠させる要素なのだが、プロローグとしての「はしがき」、それと「恥の多い生涯を送って来ました」という手記の書き出しは、好き嫌いはいはれインパクトのあるものなので、やはり太宰は最後まで、読者への「親切」を忘れない人だったのだろう。

(小説家)

■開館三十周年記念特設展

「太宰治生誕110年」

「作家をめぐる物語」

展示資料より

①太宰治 井伏鱒二宛葉書

一九三六(昭和十一年)十二月八日消印

当館蔵

昨年、新たに収蔵した井伏鱒二の宛に宛てた絵葉書で、表面は「FAMOUS PLACES OF ATAMI (熱海名所) 梅林の美観」の文字が印刷されたモノクロ写真。

太宰は、一九三六年十一月十二日、パ

ビナル中毒の治療のため入院していた

東京武蔵野病院を退院。井伏夫妻は入院

から退院、退院後の住まいがしまで世

話をしている。退院から約二週間後に、

当時、生活をともししていた小山初代を

東京に残して熱海温泉に赴き、「二十世紀

旗手」を脱稿した。初めは旅館八百松に

滞在したが、葉書に「昨夜、まへの宿

出されました、こちらへ移りました」と

あるように、十二月七日、村上旅館に移っ



た。十二月下旬、檀一雄は初代に頼まれ

て宿代等の金を太宰の許に届けるが、二

人は支払いをせずに遊んで金を使い果た

したため、檀が人質になり、太宰が東京

の井伏の家に借金に行くことになった、

いわゆる「熱海事件」がおきた。

当時の状況は、井伏鱒二「十年前頃—

大宰治に関する雑用事」(「群像」一九四

八年十一月)や檀一雄『小説太宰治』(一

九四九年十一月六興出版社)などに詳し

い。

②太宰治 高田英之助宛書簡

一九三九(昭和十四)年二月四日消印

当館蔵

二〇〇九年の企画展「太宰治展 生誕100

年」以降に、新たに収蔵した高田英之助

宛書簡の内の一点。

高田英之助(一九一〇—一九九一 広

島県福山市生まれ)は「東京日日新聞」

の記者で、同郷の井伏鱒二に師事。甲府

支局時代に知り合った斎藤須美子と結婚

することになった。井伏が須美子の

両親に太宰の結婚相手を探してくれるよ

う依頼したところ、須美子の甲府高等女

学校の後輩である石原愛子の姉美知子を

紹介された。

一九三九(昭和十四)年一月八日に、

杉並の井伏宅で太宰と美知子の結婚式が

行われたが、一方で高田は、体調を崩し、

新妻の須美子を残して単身、大島に渡っ

た。太宰は、本書簡で二月十八日に来甲

することになった高田に、斎藤家の様子

を知らせ、二人で暮らせるようになった

ことを喜んでいる。結局、十八日の来甲

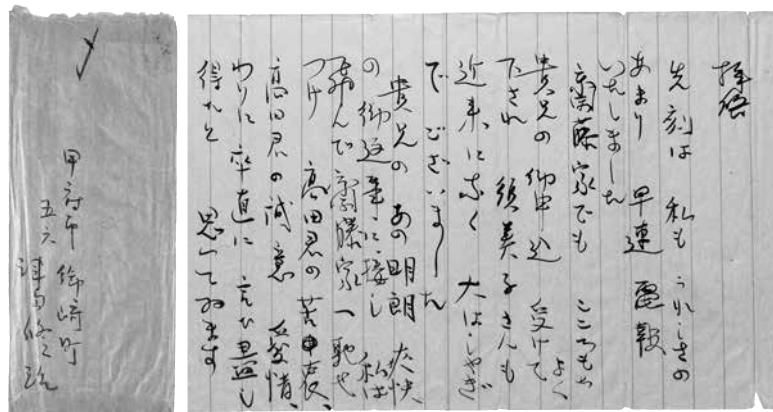
は実現しなかったが、同年十二月、二人

は世田谷区松原で結婚生活を始めた。こ

のほか、新たに収蔵した高田宛の封書一

点、葉書七点、電報三点(全集未収録)

も併せて展示する。



太宰治 高田英之助書簡 1939年2月4日消印(部分)

③地下足袋断片

当館蔵

太宰は、一九四五(昭和二十)年四月、

妻の美知子と子ども二人に続いて、甲府

市水門町二九(現・朝日一丁目)の石原家

に疎開した。

本資料は、甲府に疎開中に使用してい

た地下足袋の一部と思われる。小鉤がつ

いたもう片方の断片にも太宰の本名と石

原家の住所が書かれている。

甲府では、甲運村(現・甲府市和戸町)

に疎開していた井伏鱒二を訪ねたり、山

梨の文学者らと交流を持ったが、七月六

日の深夜、甲府市街がB29型重爆撃機に

よる空襲を受け、石原家は焼失。疎開中

に書き上げた『お伽草紙』二百枚の原稿

は、持ち出して無事だった。この体験は

翌年十一月、「薄明」として発表された。

太宰一家は、石原家から約一キロ北の

新柳町(現・武田三丁目)の大内家に二十

日ほど身を寄せた後、金木町(現・五所川

原市)の生家に再疎開した。

(学芸課 保坂雅子)



閲覧室より

開館三十周年記念閲覧室資料紹介

「映像になった文学作品」

平成をふり返って」について

谷崎潤一郎や川端康成など、様々な作家たちが映画を愛してきました。また、文学作品を原作として作られた映画は、多く存在します。文学が映画を支え、映画によって時代を超えて文学が新たな輝きを放つ。映画と文学は、相思相愛の関係と言えるのではないのでしょうか。

当館閲覧室では、開館三十周年記念閲覧室資料紹介「映像になった文学作品 平成をふり返って」と題し、映画やテレビドラマなど、平成の時代に映像化された文学作品や関連資料を紹介しています。四月七日(日)まで開催中で、入場無料です。

映画「道―白磁の人―」や「太陽の坐る場所」など、原作となった図書や、関連する雑誌記事、また、一部の作品については映像を収録したDVDを展示しています。DVDは、閲覧室内に二部屋

あるビデオブースで、ゆったりと視聴していただくことができます。

この資料紹介では、平成という時代をふり返りながら資料をご覧いただきたいと考え、平成に起こった出来事や流行語を年表にし、資料と共に展示しています。

紹介する文学作品が、なぜ平成のその年に映像化されたのか。そこにはきっと、平成という時代の流れが関係しているのでしょうか。今回ご紹介している資料の中に、井上靖著『おろしや国酔夢譚』の昭和四十三年に刊行された初版本があります。江戸時代、漂流してロシアに渡り、様々な困難を乗り越え日本に帰ってきた大黒屋光太夫の生涯を描いた小説で、映画化され、平成四年に公開されました。撮影は、平成三年、極寒のソビエト連邦で行われており、この年にソ連は崩壊します。この映画は、ソ連解体に至るペレストロイカという改革の流れがなければ、撮影が難しかったと言われています。今回の展示は、そのような、映像化の背景にも思いをはせながら、ご覧いただければ幸いです。

山梨県立文学館は、平成元年に開館し

てから、今年で三十周年を迎えます。平成のあゆみは、文学館のあゆみでもあります。そこで、年表には、当館に関する出来事も掲載しました。

あわせて、開館から現在までに開催した企画展図録を紹介しています。一冊一冊の図録に、当館の歩んできた歴史が刻まれています。図録をご覧いただくことで、観たくても観られなかった展示や、もう一度観たかった展示を、じっくりと味わっていただくことができます。

平成最後の年を、平成と共に歩んできた山梨県立文学館で過ごしてみませんか。

(資料情報課 中島桂子)



「寄贈資料より」

(平成三十年八月～三十一年一月)

○清水久美子氏より辻邦生書簡二点、図書四点。

○一瀬茂氏より「野間文芸賞(第五十一回) 野間文芸新人賞(第二十回) 平成十年度要項」パンフレット ほか特殊資料一・四点、図書四点、雑誌七点。

○秋山正統氏より秋山秋紅蓼「青と山蒼々海征くところに捷つ」一枚物ほか二・三三点。

○小林秋生氏より里見弴「多情即仏心」扇面額装。

○柏木鉄雄氏より高浜虚子「新蕎麦会選句稿」軸装ほか四点。

○中村修二氏より中村修二画「冬の動物園」挿絵原画八点。

○浅川徹氏より浅川徹画「同調とバランス」挿絵原画十二点。

○古屋良昭氏より古屋良昭画「逕をゆく」挿絵原画二十点。

○上條曉隆氏より上條曉隆画「春泥」挿絵原画五点。

○石井耕氏より「祖国の砂 日本無名詩集」を跡付ける」抜き刷り。

館からのご案内

■教育普及事業

※各企画・講座とも参加・受講無料

○年間文学講座(定員500名)

・講座1「日本文学と富士山―古典を中心に」

昨年度に続き「日本文学と富士山」を共通テーマに、本年度は古典分野における講義を開催します。都留文科大学の先生方五名によるリレー式講座です。

講師 鈴木武晴(都留文科大学教授)
5月10日(金)「万葉集の山部赤人の富士の山を望る歌」

6月7日(金)「万葉集の高橋虫麻呂の富士の山を詠む歌」

・講座2「いま『文豪』の作品を読みなおす―伝記と代表作の関係」

講師 大木志門(山梨大学准教授)
5月30日(木)「太宰治『道化の華』―「前衛」時代の太宰」

6月20日(木)「田山花袋『蒲団』―「私」を描くまでの苦闘」

・いずれも午後2時～ 会場 講堂

※お電話か当館受付でお申し込みください。

○名作映画鑑賞会(定員500名)

・午後1時30分～ 会場 講堂

※申込不要。当日定員を超えた場合、それ以降の入場をお断りいたします。

※年間文学講座、名作映画鑑賞会の年間予定は、チラシまたは四月以降の当館ホームページをご覧ください。

○大人のための初心者俳句ワークショップ(定員40名)

講師 井上康明(俳人・郭公) 主宰

4月27日(土) 午後1時30分

会場 研修室

※要申込。往復葉書に①郵便番号②住所

③氏名・ふりがな④電話番号を明記し、当館までお申し込みください。

申込〆切3月22日(金) 必着

○初心者短歌教室(定員20名)

講師 三枝浩樹(歌人・山梨県歌人協会会長)

5月18日(土) 午後1時30分

6月1日(土) 午後1時30分

会場 研修室

※要申込。往復葉書に①郵便番号②住所

③氏名・ふりがな④電話番号を明記し、当館までお申し込みください。

申込〆切4月19日(金) 必着

○読書会

基本的に毎月第二日曜日の午前10時から開催。

5月19日(日) 藤原正彦

6月9日(日) 太宰治

※読書会の年間予定はチラシまたは四月以降の当館ホームページをご参照ください。お電話か葉書(氏名・電話番号を明記)でお申し込みください。

■展示室

常設展

○第一～四室(展示室A)の展示替え

各コーナーの展示替えとともに、第一室で開館三十周年を記念し「近代文学の名作」をテーマに、期間限定の資料

展示を次のとおり行います。

・春の常設展

3月12日(火)～6月2日(日)

近代文学の名作1 樋口一葉

「たけくらべ」～4月21日(日)

近代文学の名作2 樋口一葉

「にぎりえ」4月23日(火)～

・夏の常設展

6月4日(火)～8月25日(日)

近代文学の名作3

芥川龍之介「或阿呆の一生」

○第五室(展示室B)の展示替え

山梨出身・ゆかりの文学者一〇四名を

二期に分けて展示。

・小説・評論・随筆・翻訳・ジャーナリズム・戯曲・脚本・童話・童謡

4月27日(土)～9月1日(日)

・詩・短歌・俳句・川柳・漢詩

10月5日(土)～3月8日(日)

※第五室は3月12日(火)～4月26日

(金)は休室します。

■閲覧室「入場無料」

○閲覧室資料紹介

・「映像になった文学作品 平成をふり返って」～4月7日(日)

・「太宰治を読む」

4月27日(土)～6月23日(日)

・「飯田蛇笏」(4月26日生まれ)

4月19日(金)～5月9日(木)

・「文学者の誕生日にちなんだ資料紹介」

6月8日(土)

○書庫見学

6月8日(土)

①午前11時～ ②午後2時～

次の皆様からも図書・雑誌等をご寄贈いただきました。(敬称略)

相原 悦夫	清水 康次
相原 千里	進藤 通子
赤星 美佐	鈴木 一正
芦澤 紗知子	鈴木 ひとみ
石川 博	反田 たか子
一瀬 公弘	田村 元
井上 康明	鶴田 清司
大橋 毅彦	中村 吾郎
岡田 日郎	中村 幸子
尾崎 左永子	中村 啓信
片山 由美子	野澤 俊之
勝又 浩	秦 恒平
角川 春樹	平松 伴子
川崎 勝信	備仲 臣道
岸本 尚毅	堀内 万寿夫
清須 浩光	松本 徹
小谷 瑛輔	三橋 透
小林 璃沙	宮坂 玲子
小山 弘明	山村 泰彦
最光 蝕	渡辺 めぐみ

この他に団体の方々からもご寄贈いただいております。

■平成30年度の教育普及事業報告

◇企画展「草野心平展 ケルンクックの詩人、富士をうたう。」関連事業

十月二十一日に

小説家の島田雅彦

氏による講演会

「牧歌への回帰」を

開催。草野心平の詩

の世界観や表現の特徴について語った。



さらに十月二十八日に詩人・作家の蜂

飼耳氏による「草野心平、詩の理想を求

めて」を、十一月十日には都留文科大

教授の阿毛久芳氏による「宮沢賢治、高

村光太郎、そして草野心平―コスモス、

世界共通意識と孤絶意識にかかわって

」と題する講演会をそれぞれ開催し

た。また、当館学芸員の講座として、十

月十七日(水)に学芸員の伊藤夏穂によ

る「草野心平と富士山―展示のみどころ

」を開講した。

◇文学創作教室

三枝昂之館長・三枝浩樹氏による短歌講座

九月八日(土)と十二月十五日(土)、

短歌経験者のレベルアップを目的として

短歌講座を行った。二つの講座はそれぞ

れ単独で募集を行い、九月は三枝館長

十二月は三枝浩樹氏(歌人・「沃野」代

表)が講師を担当した。

九月は一般二十九名、高校生九名が、

十二月は一般十二名、高校生二十四名が

参加した。

前半は短歌の詠み方に関する講義、後

半は参加者が事前に提出した歌を講師が

批評する形で進められた。

今年度は高校生の受講者が多く、その

中の一人が詠ん

だ歌が一月に開

催された宮中歌

会始の詠進歌に

選出されたこと

は、成果の一つと

なった。



◇朗読公演会「耳で聴く芥川龍之介」名

作『鼻』『歯車』の世界

九月二十四日(月)、朗読公演会が開催

された。華のん企

画の制作で、辻輝

猛、山谷典子、井

上倫宏の三名の俳

優により芥川龍之

介「鼻」「歯車」

の朗読が行われ

た。



アンケートには「プロの人達の発音や感情が素晴らしく、ついつい聴き入ってしまった」「文学館らしい企画で良かったと思う」等の感想があった。

◇博学連携事業

・出前授業(実施順)

「短歌の作り方」講座

浅川中・都留高・鯉沢中・中央高(4校)

「俳句の作り方」講座

北杜市放課後子ども教室(須玉・大

泉・武川・長坂・明野計5回)

「秋山秋紅蓼の人と作品」解説

鯉沢中(1校) ※秋紅蓼は同校校歌の

作詞者

・移動文学館(貸出順)

石川啄木等身大パネルセット

御坂中・長坂中・中央高・石和中(4校)

飯田蛇笏・龍太ちまちな人形セット

中央高(1校)

村岡花子と「赤毛のアン」セット

中央高・上野原西中・国母小(3校)

宮沢賢治イーハトーブの世界セット

中央高・富河小・境川小・国母小・

御坂西小・山城小(6校)

特設展「作家のデビュー展」関連

(文豪ストレイドッグス)セット

中央高・鯉沢中・東桂中・御坂中・田富中・押原中・富竹中・櫛形中・巨摩高・白根高・甲府南高・玉穂中・玉幡中・甲府昭和(14校)

芥川龍之介の夏休みセット

御坂中・鯉沢中・上野原高・中央高

(4校)

・総合教育センター共催事業

「あなたの心を鏡開き太神楽入門」

7月31日(火)

講師 かがみもち(夫婦太神楽)

太神楽師 丸一仙三・丸一仙花

・平成30年度初任者研修博学連携研修

10月19日(金)

学校教育活動の中で、文学館をどのよ

うに活用していくかをグループで討議

し、交流し合った。

・来館実績

(館内学習プログラム・来館順)

都留文科大・鯉沢中・市川中・身

延中・白根御勅使中・葦崎東中・八

田中・高根中・田富中・櫛形中・甲

西中・双葉中・若草中・玉穂中・押

原中・城西高・長坂中・中央高・北

東中・甲斐清和高・和洋女子大・塩

山高・新田小・宝小・甲府城西高・

女子学院高・甲府昭和(29校)

小・甲府看護専門学校

■樋口一葉記念

第二十七回やまなし文学賞結果

一、応募状況

本文学賞は、山梨県と深いゆかりを持つ樋口一葉の生誕一二〇年を記念して、平成四年に制定された。山梨県の文学振興と、日本の文化発展を図り、今回も小説募集と研究・評論の推薦を受ける二部門で実施した選考委員は小説部門が坂上弘・佐伯一麦・長野まゆみ、研究・評論部門は、中島国彦・関川夏央・兵藤裕己の各氏。

小説部門の応募作品数は三二三編。うち男性は二二三編、女性八七編。山梨県内からは二三編だった。

研究・評論部門の推薦延数は一二二編。うち自薦が九編(単行本八冊 雑誌掲載一編)、他薦が一一二編(すべて単行本)だった。

二、選考結果

選考会は、小説部門を二月十二日に、研究・評論部門を二月十四日に學士會館でそれぞれ行い、受賞作を決定した。選考結果の発表を、三月一日に行った。

小説部門のやまなし文学賞には百万円、同佳作二編には各三十万円、研究・

評論部門のやまなし文学賞二編には各五十万円の賞金が贈られる。

また、小説部門の三編は山梨日日新聞紙上及び同紙電子版に掲載、やまなし文学賞「ログアウト」は単行本として刊行する。

◆受賞作品◆

小説部門

□やまなし文学賞

・「ログアウト」

足立絵莉(愛媛県在住)

「受賞の言葉」

この度は、やまなし文学賞という名誉ある賞をいただきまして、誠に感謝申し上げます。選考委員の先生方に心よりお礼申し上げます。歴代の素晴らしい受賞者の末席に名を連ねさせていただくとを嬉しく思っております。

私は、文学の郷、愛媛県で生まれ育ちました。愛媛にゆかりのある文豪夏目漱石をはじめ、正岡子規という偉大な俳人を生み出した地元にとっても愛着を持っております。しかし、理系出身だった私が本格的に文学に親しみ始めたのは少し遅く、二十歳を過ぎてからのことでした。言葉で表現する面白さを知ってから、多くの本と親しみ、山梨県にゆかりのある樋口一葉の作品と出会い、生い立

ちや作品の背景などを辿っていくなかで、努力家で向上心が高くとても本が好きな一葉に想いを馳せることも多々ありました。そこで「私も何か自分の言葉で書いてみたい」と思い立ち、初めて小説の形に仕上げたのが、今回の作品です。

今後、文学としての小説を書いていくにあたり、本日はいただいた栄誉を励みとし、文学の探究、執筆への努力など自己研鑽を積んでいく所存でございます。この度は誠にありがとうございました。

□やまなし文学賞佳作

・「息子」

福島敏真(北海道在住)

・「バースデイクーキ」

大和マヤ(埼玉県在住)

研究評論部門

□やまなし文学賞

・鈴木俊幸

『近世読者とそのゆくえ 読書と書籍流通の近世・近代』(二〇一七年十二月)

(略歴) 中央大学大学院博士課程単位取得満期退学。中央大学文学部教授。東京都在住。

・山本芳明

『漱石の家計簿 お金で読み解く生活と作品』(二〇一八年四月)

(略歴) 東京大学大学院博士課程人文科学研究科国語国文学専門課程単位取得満期退学。学習院大学文学部教授。東京都在住。

■「資料と研究」第二十四輯目次

A5判一二〇頁・三月下旬発行

・講演録「草野心平、詩の理想を求めて」 蜂飼耳

・講演録「井伏鱒二の笑いと悲しみ」 町田康

・井伏鱒二書簡翻刻

―熊王徳平・岩月くま・小尾十三ほか― 中野和子

・佐佐木信綱・和歌革新への道

―長歌改良をめぐる― 三枝昂之

・飯田蛇笏 高室呉龍宛書簡翻刻 高室有子

・佐佐木茂索日記「且楽軒誌」壺・式翻刻 保坂雅子

・中村星湖作成スクラップブック[㊤] その七

飯沼典子・小林幸代・中島桂子

館 の 日 誌

- 9・15 (土) 年間文学講座 1 「武将ゆかりの寺々の伝説—恵林寺ほか」 講師 長谷川千秋 (山梨大学教授)
- 9・16 (日) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 9・19 (水) 出前授業 (北杜市武川放課後子ども教室)
- 9・21 (金) 企画展「歿後30年 草野心平展 ケルンクックの詩人、富士をうたう。」レセプション
閲覧室資料紹介「草野心平の世界」(~11・25)
- 9・22 (土) 企画展「歿後30年 草野心平展 ケルンクックの詩人、富士をうたう。」開始 (~11・25)
- 9・24 (月・祝) 朗読公演会「耳で聴く芥川龍之介—名作「鼻」「歯車」の世界」
製作 華のん企画
出演 辻輝猛 (俳優・演出家)・山谷典子 (俳優・劇作家)・井上倫寛 (演劇集団円所属)
- 10・3 (水) 飯田蛇笏・龍太碑前祭
出前授業 (北杜市長坂放課後子ども教室)
- 10・6 (土) 名作映画鑑賞会「愛と死を見つめて」
- 10・7 (日) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 10・11 (木) 教師のための学習会
- 10・14 (日) 第6回読書会
- 10・17 (水) 企画展関連講座「草野心平と富士山—展示のみどころ」 講師 伊藤夏穂 (当館学芸員)
- 10・18 (木) 年間文学講座 2 「帰朝者たちの富士山—永井荷風・横光利一」 講師 古川裕佳 (都留文科大学教授)
- 10・19 (金) 総合教育センター共催事業 初任者博学連携研修
- 10・21 (日) 企画展関連講演会「牧歌への回帰」
講師 島田雅彦 (小説家)
- 10・26 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「山崎方代」(~11・15)
- 10・27 (土) 年間文学講座 1 「山河と甲陽八景—自然を歌う」
講師 長谷川千秋 (山梨大学教授)
- 10・28 (日) 企画展関連講演会「草野心平、詩の理想を求めて」
講師 蜂飼耳 (詩人・作家)
- 11・1 (木) 年間文学講座 2 「富士山と国語教科書—国定教科書を中心に」
講師 牛山恵 (都留文科大学名誉教授)
- 11・7 (水) 出前授業 (鯉沢中学校)
- 11・10 (土) 企画展関連講演会「宮沢賢治、高村光太郎、そして草野心平—コスモス、世界共通意識と孤絶意識にかかわって」
講師 阿毛久芳 (都留文科大学名誉教授)
- 11・11 (日) 第7回読書会
- 11・17 (土) 名作映画鑑賞会「幕末太陽傳」
- 11・20 (火) 書庫見学
茶室「素心菴」にて呈茶
- 11・24 (土) 年間文学講座 1 「人々の暮らしと文化—天狗伝説・荏草孫右衛門」
講師 長谷川千秋 (山梨大学教授)
- 11・30 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「与謝野晶子」(~12・20)
- 12・6 (木) 年間文学講座 2 「富士山と国語教科書 2—検定教科書を中心に」
講師 牛山恵 (都留文科大学名誉教授)
- 12・9 (日) 年間文学講座 3 「句会の記録をよむ—子規・虚子・碧梧桐の記録から」 講師 高室有子 (当館学芸員)
- 12・15 (土) 年間文学講座 1 「まとめ・開府以前の「やまなし」—和歌刻書土器が教えてくれること」
講師 長谷川千秋 (山梨大学教授)
文学創作教室「三枝浩樹短歌講座」
- 12・16 (日) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 1・6 (日) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 1・12 (土) 第9回新春百人一首教室 講師 竜王かるた会
- 1・13 (日) 第9回読書会
- 1・26 (土) 「開館30周年記念 新収蔵品展 手書きのリズム」開始 (~3・24)
- 2・1 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「中村星湖」(~2・21)
- 2・6 (水) 出前授業 (北杜市明野放課後子ども教室)
- 2・8 (金) 閲覧室資料紹介「映像になった文学作品 平成をふり返って」(~4・7)
- 2・10 (日) 第10回読書会
- 3・10 (日) やまなし文学賞表彰式
第11回読書会

利用のご案内

■開館時間

- 展示室 9:00~17:00 (入室は16:30まで)
- 閲覧室・研究室 9:00~19:00 (土・日・祝日は18:00まで)
- 講 堂・研修室 9:00~21:00
- 茶 室 9:00~21:00 (準備・片付けの時間も含まれます)
- ミュージアムショップ 9:30~16:20

■休館日 (3月~6月)

- 3月4・11・18・25日
- 4月1・8・15・22日
- 5月7・13・20・27日
- 6月3・10・17・24日

■常設展観覧料

	個 人	団体 (20人以上)	美術館との 共 通 券
一 般	320円	250円	670円
大 学 生	210円	170円	340円

※65歳以上の方、障害者手帳をご持参の方と介護の方、並びに小・中・高・特別支援学校生の観覧料は無料です。

施設利用のお申し込みについて

- 講堂・研修室・研究室・茶室の申し込みは、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。
- ☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申し込みの際、ご説明いたします。

山梨県立文学館 館報 第107号
平成31年3月10日発行

編集兼
発行人 三 枝 昂 之

発行所 山 梨 県 立 文 学 館

〒400-0065

山梨県甲府市貢川一丁目5-35

☎ 055(235)8080 FAX 055(226)9032

<http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>

※紙面・記事・写真等の無断転載・転用はお断りします。